

レポート作成におけるルーブリック評価の再考

一教員と受講生の評価観点のずれと レポート産出の変化からの考察一

三井 一巳・鄭 在喜・藤田 百子・吉田 好美

キーワード：ルーブリック評価, 意識化, レポート活動, 中上級レベル

1. はじめに

本学の日本語教育研究センター（以下、CJL）の日本語科目は、「総合科目群」と「テーマ科目群」に分けられており、そのうち「総合科目群」は「初級から上級前半の学習者（レベル1-6）を対象に、標準化されたシラバスと教材によって展開され、四技能を総合的に学習する科目」である¹⁾。この総合科目群の総合日本語5レベル（以下、総合5）は、中上級レベルとしてレポート活動を実施している。

総合5におけるレポート活動は、学期中に1回、教科書（『新中級から上級への日本語』The Japan Times）で扱われている社会問題について1500-1800字程度で書く活動である。当レベルではレポート執筆に際し、補助教材（冊子）を用いて文体や文末表現などの基本的な指導を行っている。レポートには初稿と修正稿があり、初稿は教員・受講生ともにルーブリック評価表をもとに評価し、修正稿は初稿を踏まえた改善点を教員が評価する。しかしながら、受講生のレポートの指導の際には、教員と受講生の間で評価の観点にずれが見られ、それが指導上のミスコミュニケーションを誘発することもある。その結果、対応に苦慮する教員が散見されるといった課題も見られる。また、ルーブリック評価表の評価観点によって、学習者は自身のレポート活動のモニターすること、教師は指導を有効に導くことを期待されるが、評価観点のずれの詳細は明らかとなっていない。

そこで、教員と受講生間にどの項目において、どの程度の評価のずれが見られるのかを調べるため、総合5の受講生と教員を対象にレポート作成についての「事前調査」と「ルーブリック評価表調査」を実施した。更に、レポートの初稿と修正稿の評価を比較することによりルーブリック評価表の有効性の検証を試みた。本稿ではこれらの調査結果について述べる。

2. 先行研究

ダネル他（2014）は、ルーブリックを適切なタイミングで有益なフィードバックを学習者に与えるという点で価値ある道具であるとし、また「ルーブリックを使用すると受講生は自らの弱点を発見することができ、自分自身で改善計画を立てることができるようになる」と述べている。更に、藤長・中尾（2013）では、日本語の授業の受講生がルーブリッ

クを用いてアウトプットしたものを自分でモニターし、改善することができるとしていることから、ルーブリックの教育的効果と有効性が示唆されている。日本語教育現場でルーブリック評価表を用いた実践には、山同他（2017）が挙げられる。山同他（2017）では、本学の総合日本語6レベル（上級前半）においてルーブリック評価を実施したところ、教員間でルーブリックの評価のずれが見られ、それを踏まえて改善を試みたことが報告されている。しかし、前述した通り、レポートの評価は教員と学生間でもずれが生じているが、現状ではその評価観点の具体的な相違は明らかになっていない。

そこで本調査では、教員と受講生との評価の観点のずれに関して調査することでその評価観点の具体的な相違を明らかにする。まず事前調査で受講生のレポートに対する意識を調べ、分析する。そして、レポートの初稿と修正稿の違いを調査し、ルーブリックを用いた評価の有効性の検証を試みる。

3. ルーブリック評価表について

ルーブリック評価表は、本学の「総合日本語6レベル」²⁾と「総合日本語4レベル」³⁾で使われているルーブリック評価表を参考にし、評価基準を調整し「準備（アウトライン）」「構成」「内容」「表現の適切さ」「形式」の5項目に分類して作成した。更に各項目には評価のポイントの詳細が示されており、その評価項目にしたがって「A⁺」から「C」の4段階形式となっている。なお、「教員用」と「受講生用」を別途に作成した。以下、表1は教員用ルーブリック評価表の内容項目の一部を抜粋したものである。教員用と受講生用の内容についての文言は同様であるが、教員用には表1の下線部のように、評価に対する説明や点数の算出方法、評価の仕方などを詳細に記載してある。

表1 教員用ルーブリック評価表（補足説明付（一部抜粋））

	A ⁺ （とても良い）	A（良い）	B（もう少し）	C（頑張りました）
内 容	<input type="checkbox"/> 序論：レポートのテーマの背景と、背景と明確に関連付けられた問題提起が書かれている。(1.5点) <input type="checkbox"/> 本論：客観的なデータに基づいて、自分の意見の論拠が導きだされており、説得力がある。(1点)	<input type="checkbox"/> 序論：レポートのテーマの背景と問題提起がどちらも書かれている。 <u>レポートの目的だけでは問題提起と考えない。(1.5点)</u> <input type="checkbox"/> 本論：客観的なデータに基づいて、自分の意見が述べられている。 <u>客観的なデータとは、レポートのテーマに沿った信頼できる情報源である場合。(1点)</u>	<input type="checkbox"/> 序論：レポートのテーマの背景と問題提起のどちらかしか書かれていない。または、はっきり書かれていない。(1点) <input type="checkbox"/> 本論：データに基づいて自分の意見の論拠を示しているが、客観的で適切なデータではない。 <u>ウィキペディアや個人ブログなど。なお、データは提示されているが、意見を直接指示する論拠ではない。(0.5点)</u>	<input type="checkbox"/> 序論：レポートのテーマの背景と問題提起のどちらも書かれていない。 <u>序論がない文章の場合。</u> <input type="checkbox"/> 本論：データのみ、または自分の意見のみしか述べられていない。 <u>信頼できない情報源しか書かれていない場合。または、自分の個人的な意見しか書かれていなくて論拠が示されていない場合。</u>

三井一巳・鄭在喜・藤田百子・吉田好美／レポート作成におけるルーブリック評価の再考

総合5における到達目標は「A」評価とした。各教員は、「A」評価欄に書かれている内容が十分にできるように指導を行い、「A⁺」評価欄に書かれている内容はレベル向上のための目標であることを受講生に説明する。そして、教員は評価の際、どの部分ができていないのかを下線を引いて受講生に示し、ルーブリック評価表の最終評価は受講生の評価と教員の評価を擦り合わせて行うこととなっている。このようにルーブリック評価は受講生に不足している部分を明示化し、かつ受講生の気づきを促すことを目的としている。受講生はその部分を修正し修正稿を提出する。

4. 調査概要

本調査は、2017年度春学期総合5の受講生（70名）と教員（8名）に対して、「事前調査（質問紙調査）」と「ルーブリック評価表調査」を実施した。なお、当調査はいずれも調査協力に同意した教員と受講生に限り行った。

4-1. 事前調査

事前調査は、筆者らが作成し、補助教材（冊子）を用いたレポートに関する基本的な指導が終わり、レポート執筆に入る前に実施した（有効回答数70名）。どのようなレポートがいいレポートだと思うかという質問に対し、構成やテーマ等10項目の観点から成る選択肢と自由記述で構成されている。選択肢は複数回答可とした。選択肢の項目はルーブリック評価表の評価項目を参考に作られたものである。詳細は、「5-1. 事前調査による結果および考察」の図1を参照されたい。

4-2. ルーブリック評価表調査

ルーブリック評価表調査は、レポート執筆後、受講生のレポートの初稿に対して、受講生と教員のルーブリック評価表を用いて行った（有効回答数49名）。そして、ルーブリック評価表の有効性を検証するために、レポートの修正稿を用いてどれだけ改善されたか検証を行った。これは初稿と修正稿の評価を比較し、改善された項目や程度をみることで、ルーブリック評価の効果を探るためである。対象としたレポートは、教員による初稿の評価が22点満点中50%に満たない11点以下の学生、下位8名の受講生のレポートであり、4名の担当教員により評価を行った。

5. 結果と考察

5-1. 事前調査による結果および考察

事前調査の結果を図1に示す。左側は事前調査の選択肢項目であり、右側はその結果をまとめた図である。図の横軸の1から10は事前調査の選択肢項目で、縦軸は人数を示す。選択肢項目は主にレポートの内容面（項目3・4・5・6・7・8）と形式面（項目1・2・9・10）について問う項目になっている。その結果、受講生はレポートの形式面をそれほど重視していないことが窺えた。

【選択肢項目】

1. 構成がわかりやすい。
2. 段落に分れている。
3. レポートのテーマがはっきりしている。
4. 客観的なデータが提示されている。
5. 自分の意見がはっきりと書いてある。
6. レポートにテーマに沿った、言葉や表現が正しくつかわれている。
7. 文法の間違いない。
8. レポートの長さが適切である。
9. 引用が正しくつかわれている。
10. 指定されたフォーマットで書かれている。

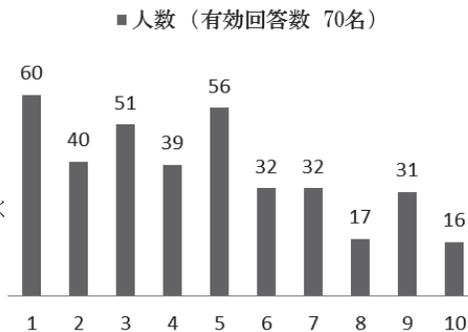


図1 事前調査の選択肢項目（左）とその結果（右）

まず、形式面に関する項目で最も高い割合を示したのは、「1. 構成がわかりやすい」（60名（85.7%））であり、その次は「2. 段落に分かれている」（40名（57.1%））であった。これらの2項目が高い割合を占めたのは、補助教材の冊子でレポートの構成や段落に関する指導を行っているからであると考えられる。しかし、同冊子を用いて指導を行った選択肢項目9（引用）や選択肢項目10（フォーマット）に関しては、それぞれ「31名（44.2%）」「16名（22.8%）」とやや低い割合を占めており、その重要性についてあまり認識していないことが窺えた。

次は、内容面に関する項目を見てみる。最も高い割合を占めたのは、「5. 自分の意見がはっきりと書いてある」で「56名（78.5%）」であった。続いては「3. レポートのテーマがはっきりしている」（51名（72.8%））であり、選択肢項目6と選択肢項目7である語彙・表現・文法の適切さ（両方ともに32名（45.7%））より、レポート全般における内容を重視していることがわかった。また、自由記述に「内容の良さ」「面白い」「ロジックが分かりやすい」といった回答が見られたことから、受講生はレポート作成において形式面よりも内容面を意識して執筆にあたっていると考えられる。

それでは実際、受講生が作成したレポートの内容面はどう評価されているのだろうか。次項では、ルーブリック評価表を用いて実施した調査結果および考察について述べる。

5-2. ルーブリック評価表調査による結果および考察

ルーブリック評価表調査は、教員と受講生にレポートの初稿について評価してもらい、その評価結果を分析したものである。

以下の表2に項目毎にその結果を示す。表の縦軸は評価基準の項目であり、各項目の1-6は評価基準の下位項目の番号を示す。そして横軸は評価および各下位項目にチェックした人数を示し、各評価項目の人数の合計を割合で表した。例えば、「準備（アウトライン）」の下位項目1の「A⁺」評価欄をみると、受講生は17、教員は5となっている。これは、受講生の場合は自己評価をするため、17名の受講生が下位項目1についてA⁺評価をつけたということである。しかし、教員の場合は一人の教員が数名の受講生の初稿を評価するため、教員欄の5名とは教員の人数ではなく、教員からA⁺評価を受けた受講生の人数を指す。

表2 ルーブリック評価表調査の結果（有効回答数 49 名）

評価項目	下位項目	受講生評価 A ⁺	教員評価 A ⁺	受講生評価 A	教員評価 A	受講生評価 B	教員評価 B	受講生評価 C	教員評価 C
準備 (アウトライン)	1	17	5	28	60	4	8	0	4
	2	14	7	30	55	5	10	0	4
	3	10	6	30	47	8	19	0	4
	計	41 (28%)	18 (8%)	88 (60%)	162 (71%)	17 (12%)	37 (16%)	0 (%)	12 (5%)
構成	1	16	1	31	51	2	22	0	2
	2	12	2	34	53	3	21	0	2
	3	7	0	33	45	6	25	0	0
	計	35 (24%)	3 (1%)	98 (68%)	149 (67%)	11 (8%)	68 (30%)	0 (0%)	4 (2%)
内容	1	11	2	34	55	4	21	0	0
	2	6	3	35	35	6	31	1	7
	3	4	0	30	44	13	27	1	5
	4	5	8	29	24	8	14	6	23
	5	5	1	29	30	14	39	0	4
	計	31 (13%)	14 (4%)	157 (65%)	188 (50%)	45 (19%)	132 (35%)	8 (3%)	39 (11%)
表現の 適切さ	1	15	1	28	69	5	6	1	1
	2	5	4	37	60	7	11	0	1
	3	1	2	34	22	13	47	1	7
	4	5	2	36	55	6	12	2	3
	5	6	1	30	36	12	31	0	5
	6	2	1	33	21	11	38	0	11
	計	34 (12%)	11 (3%)	198 (68%)	263 (59%)	54 (19%)	145 (32%)	4 (1%)	28 (6%)
形式	1	8	2	28	43	11	24	0	5
	2	8	0	29	43	10	27	0	6
	3	12	1	32	41	4	28	1	6
	4	12	3	33	48	2	18	1	7
	計	40 (21%)	6 (2%)	122 (64%)	175 (58%)	27 (14%)	97 (32%)	2 (1%)	24 (8%)

「準備（アウトライン）」においては「1. 構成」「2. 必要な情報」「3. 一貫性」の3項目を評価したが、全ての項目において受講生の自己評価は教員の評価より高い結果であった。詳細をみると、全ての項目において受講生の A⁺ 評価は 28% であるが、教員からの評価は 8% に留まっている。そして下位項目のうち「3. 一貫性」については、教員から C 評価を受けた受講生は 5%、B 評価を受けた受講生は 16% を占めているが、受講生の B 評価は 12% のみであり、C 評価は見られなかった。このことから受講生はレポート作成においてその内容の一貫性に対する認識またはその程度が教員側とずれていることが窺える。

「構成」においては「1. 序論・本論・結論」「2. 段落」「3. 段落間のつながりの表現」の3項目を評価したが、1と2項目に対して受講生は 92% が A⁺、A と評価したのに対し、教員から A 以上の評価を受けた受講生は 68% のみであり、最も開きが見られた。全ての項目において受講生の多くは A 評価をつけているが、教員からの評価は B 評価（30%）も多く、とりわけ「3. 段落間のつながりの表現」に B 評価をつけた教員が多かった。こ

のことから中上級学習者であっても段落間のつながりを表す接続の言葉の運用が不足していることが考えられる。

「内容」においては「1. 序論」「2. 本論」「3. 結論①問いの答え」「4. 結論②今後の課題」「5. 内容全体における論旨の一貫性」の5項目を評価した。受講生は78%がA⁺、Aと評価したのに対し、教員からA⁺以上の評価を受けた受講生は54%であった。受講生と教員間で最も評価のずれが見られたのはB評価であり、全体的に35%の受講生が教員からB評価を受けたのである。またC評価においても評価のずれが目立っているのが分かる。事前調査で受講生は、レポートは内容が重要であると答えていたが、内容面における教員側との評価のずれから、レポートにおける良い内容とは何かという認識が受講生と教員間で異なることが窺えた。

「表現の適切さ」においては「1. 文体」「2. 語彙・表現」「3. 文型」「4. 文の長さ・ねじれ文」「5. 文末表現・接続表現」「6. 表記の誤り」の6項目について評価した。上記の表2から分かるように、受講生と教員間で最も評価のずれが大きいのはA⁺評価とB評価である。全ての項目において受講生の12%がA⁺評価をしているが、教員からA⁺評価を受けた受講生は3%に過ぎなかった。下位項目で特に開きが見られたのは「3. 文型」に関する項目である。当項目について、受講生は13名のみがBと評価したが、教員からは47名の受講生がB評価を受けているのが分かる。このことから、中上級レベルの学生であってもレポートに相応しい文型は明確な指導が必要であることが窺えた。

最後に「形式」においては「1. 引用の量」「2. 引用と意見の区別」「3. 参考文献の書き方」「4. フォーマット」の4項目について評価したが、この項目でも全項目においてA⁺評価とB評価で受講生と教員間の評価のずれが見られた。とりわけ下位項目の「3. 参考文献の書き方」においては、12名の受講生がA⁺と評価し、B評価は4名しかいなかったが、当下位項目において教員からA⁺評価を受けたのはわずか1名であり、B評価を受けたのは28名であった。これは、事前調査で受講生がレポートの形式を軽視していることと繋がる結果であると思われる。レポートというのは内容だけではなく、その形式面、特に引用や参考文献の書き方は重要であるため、本調査の結果から指導の際には形式面に関する書き方について注意を向ける必要性が浮かび上がったと考える。

5-3. レポート修正稿における検証

本項では、前述したループリック評価の有効性を検証するため、レポートの初稿と修正稿の比較を行った結果について述べる。その結果を以下の図2に示す。図の「A～H」は8名の受講生を指し、受講生の選抜基準については前述の4-2を参照されたい。なお、比較対象とした項目は「構成」「内容」「表現」「形式」の4つであり、「準備（アウトライン）」は初稿との点数の差があまり見られなかったため、調査対象から排除した。

結果をみると、受講生のレポートは初稿から全体的に概ね改善されたといえよう。特に事前調査とループリック評価表調査で受講生が軽視しているという結果が出た「形式面」では8名中7名が初稿との差で高い割合を占め、改善が見られた。このことからループリックによる評価を行ったことにより、受講生は自身の不足している点に気づき、意識して改善につなげていたと考えられる。

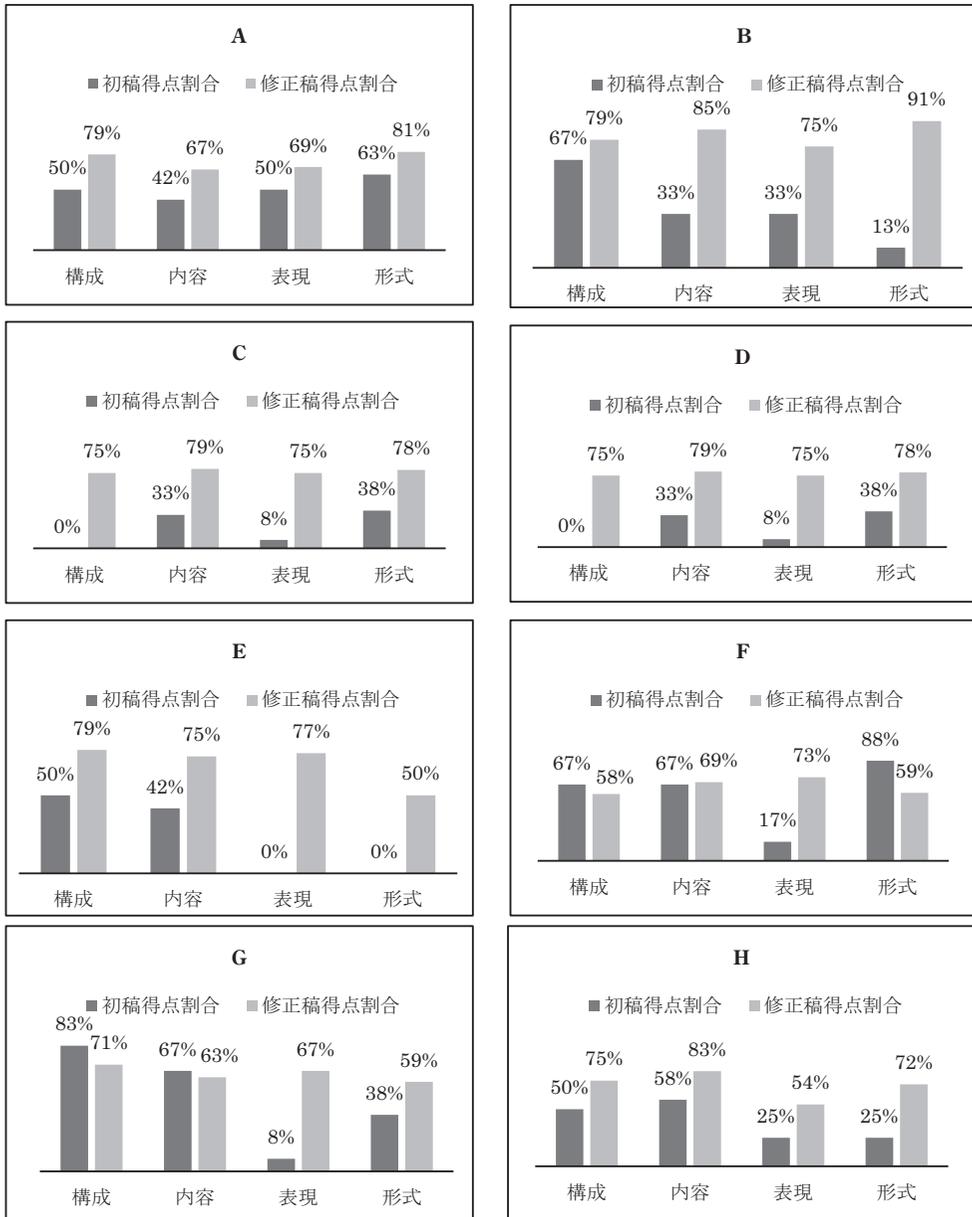


図2 レポート初稿と修正稿の評価に関する比較結果

6. まとめおよび今後の課題

本稿では、総合5の課題であったレポートの評価における教員と受講生との評価観点のずれを、事前調査とルーブリック評価表調査を通し、その評価観点の具体的な相違を明らかにした。そして、下位群8名のレポート修正稿をみる限り、受講生はルーブリック評価の項目を手掛かりにレポート作成のプロセスを意識化していたことが推察された。

今回の調査では、初稿と修正稿の得点差からルーブリック評価表の有効性の検証を試み

たため、下位群の学生のみ調査を実施した。しかし、レポート作成の知識や経験が不足しているという背景も考えられるため、ルーブリック評価表がどの程度当該学生のレポート改善に対し有効に働いているかまでは検証できていない。今後は上位群の学生の産出の変化においても同様の傾向にあるかを調査し、ルーブリック評価表を用いたレポート指導の可能性を検討したいと考える。

注

- 1) 早稲田大学日本語教育研究センター
< <https://www.waseda.jp/inst/cjl/about/education/curriculum/> > (2018年8月27日閲覧)
- 2) 山同他(2017)を参照のこと。
- 3) 高橋他(2017)を参照のこと。

参考文献

- 山同丹々子・高橋雅子・伊藤奈津美・藤本朋美・安田励子(2017)「ルーブリック作成と評価観点の「ずれ」の分析—上級前半レベルのレポート課題—」『早稲田日本語教育実践研究』第5号, 123-130
- 高橋雅子・杉本美穂・飛田美穂・山方純子(2017)「プレゼンテーション活動におけるルーブリックの作成と活用—公平な評価と学習者への指標の明示化を目指して—」『早稲田日本語教育実践研究』第5号, 189-190
- ダネル・スティーブンス, アントニア・レビ(2014)佐藤浩章・井上敏憲・俣野秀典(訳)『大学教員のためのルーブリック評価』玉川大学出版部
- 鄭在喜・吉田好美・藤田百子・三井一巳(2017)「中級から中上級への向上に必要な要素に関する一考察—ルーブリック評価表を用いて—」『日本語教育方法研究会』Vol. 24 (No. 1), 26-27
- 藤長かおる・中尾有岐(2013)「JF日本語教育スタンダードを利用した「教師向け日本語講座」改善の試み」『日本語教育紀要』第9号, 89-107

(みつい かずみ, 早稲田大学日本語教育研究センター)

(ちょん じえひ, 早稲田大学日本語教育研究センター)

(ふじた ももこ, 早稲田大学日本語教育研究センター)

(よしだ よしみ, 早稲田大学日本語教育研究センター)